魔法少女リリカルなのは～漆黒の月～

卍解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～漆黒の月～

【Ｎコード】
Ｎ５６１０Ｎ

【作者名】
卍解

【あらすじ】
藍染との戦いに勝利した黒崎一護は忙しいながらも昔と同じ様に学校に通い、死神代行としての仕事をこなしていた。
しかしある日、目覚めるとそこは自分が全く知らない森の中だった。
突如、謎の機械に襲われ、二人の少女と出会う。
そして、一護は謎の事件に巻き込まれていく・・・

Prologue

藍染の反乱から約四年の月日が経った。
死神代行の黒崎一護の活躍により藍染を倒すことができたが護廷十三隊の被害は大きかった。
護廷十三隊の隊長達の殆どが怪我をしていた。
だが、それも時と共に癒えていった。
藍染の反乱後は特に大きな事件も無く一日、一日が平和だった。
一護は無事に高校を卒業し、現在は近くの大学に通っている。
とは言っても、死神代行としての虚退治の仕事で夜も退治しに行かなければいけないため大忙しである。
その日も大学が終わった後に大急ぎで虚退治に行ったためくたくたになって帰ってきて、着替えずにベットに倒れ込んだ。

「あ～マジでしんどい・・・尸魂界も誰か俺の代わりを送ってくれんねぇかな・・・」

一護には珍しい弱気発言である。
考え事をしている内にレポートを書かなければいけなかったことを思い出し電気をつけてレポートを書き始めた。
しかし、夜も虚退治に行ったりしている為、睡眠時間も短くなっている一護はすぐにうとうとし始め、そのまま寝てしまった。
少したつと突如、一護が光に包まれた。
その光がおさまった時、そこには一護の姿は無く、あるのは書きかけのレポートだけだった・・・・・・

第1話　出会い（前書き）

一護となのは、フェイトの出会いです。

第1話　出会い

ある森に青空が見える少し開けた場所があった。
とても静かな場所で聞こえる音といえば心地好い風の音だけ・・・
そんな場所の一本の木に一護が寄り掛かって座り、寝ていた。

「んっ・・・」

ゴンッ！！

一護は急に動いた為、後頭部を木におもいっきりぶつけてしまった。

「痛ってぇえ！！」

一護は痛みで飛び起きた。

「痛ってぇ～何だよ一体・・・って何処だ此処！？」

一護は目を開いた途端、飛び込んできた景色に驚いた。
今まで自分の部屋でレポートを書いていて途中でうとうとしていたはずなのにいつの間にか外に出ていて周りは草木が生い茂る森、空を見上げると夜で暗いはずなのに青空が広がっていた。
そして特に驚いたのが・・・

「なんで月が二つもあるんだ！？」

月が二つあることだった。

「一体どういうことだよ・・・」

一護は突然の事態にかなり混乱していたが、

「でも、どうこう言っても何もわかんねぇしとにかく人を探すか・・・」

そう言って一護は人を探すため歩き出した。

そこから数キロ離れた上空には二人の少女が飛んでいた。
一人は栗色の髪に白く胸の所の赤いリボンが特徴的なバリアジャケットを着た少女、高町なのは。
もう一人は金髪の髪に黒いバリアジャケットを着た少女、フェイト・T・ハラオウンだ。
JS事件（ジェイル・スカリエッティ事件）が解決した後、機動六課が解散し、それぞれが元の職場に戻ったり新しい職場に移っていったりしていた。
しかし、事件が解決してから出現する数が減っていたガジェットが最近、多発するロストロギア関係の事件で頻繁に出現するようになった。
それと平行する様に謎の怪物が出現する様になったためそれらの調査とロストロギア確保のために再び、機動六課は再建された。
その再建された矢先にミッドチルダの首都クラナガンから離れた希

少な魔導生物が多く生息する森で中規模の次元震が観測された。
ロストロギアの可能性もあるため機動六課からなのはとフェイトが派遣されていた。

「フェイトちゃん、次元震が観測された場所ってもうすぐだよね？」

「うん。もう少し行けば着くよ」

会話をしながら辺りを見回していると不意に森の開けた場所が目に入った。
それを見た瞬間、二人の目は驚きで見開かれた。
なのはとフェイトの見た先には、希少な魔導生物の大量の死骸があった。
地面に生えた草は魔導生物達の血の色に染まり、所々に肉片が散らばっていた。

「酷い・・・」

「誰がこんなことを・・・・許せない！！」

自分が人造魔導師であるため命のことに関しては人一倍敏感なフェイトは怒りを露にした。
その時、

〈此処から４ｋｍ先でガジェットの反応があります。
そのすぐ近くに生態反応もあります！！〉

なのはのデバイス、レイジングハートが言った。

「本当！？」

〈はい〉

「なのは！！」

「うん。急ごうフェイトちゃん！！」

そう言ってその場から一旦離れガジェットの反応がある場所に向かった。

その頃、一護は急に現れた丸い機械、ガジェットに囲まれていた。

「何だよ、こいつら！？」

一護はいきなりガジェットが出て来たので驚いた。

驚いているとガジェット達は一斉にビームを一護に向かって放った。

ビームは一護に命中し、砂煙が舞い上がった。

しかし、

「そんなもんか？」

砂煙の中からそんな声が響き、砂煙が一気に晴れた。

その場にいたのは黒い着物“死覇装”を纏い、手に鍔も鞘もない無骨な刀“斬月”を持った死神の一護だった。

「次はこっちの番だ！！」

そう言うと一護は死神が使う高速移動法“瞬歩”を使い、ガジェットが反応する前に正面に現れ、ガジェットを斬月で切り裂いた。
正面のガジェットを潰すと一護は瞬歩でガジェットが攻撃してくる前に横に一閃し、三機を一気に両断したり、
空中から斬月を叩き付けたりしたり、
後ろに回り込み、突き刺し切り上げたりしながら次々とガジェットを潰して行った。
しかし、

「くそっ！！潰しても潰してもキリがねぇ！！」

あまりにも数が多いので元々、かなり疲れていた一護は徐々に攻撃を許し始めた。
そして遂に

「ぐはっ！！」

放たれた複数のビームを斬月で防いだ時にビームの勢いを殺し切れずに後ろに吹っ飛ばされ、木に激突した。
ガジェットはその間に好機とばかりに再び一斉にビームを放った。

「くそっ、こんな所で負けてたまるかあぁぁぁ！！！！」

一護は斬月に自分の霊圧を喰わせ、

「月牙・・・」

前方に斬月をおもいっきり振り切った。

「天衝ォォォ！！！！」

巨大な斬撃がビームを掻き消しガジェット達を飲み込んだ・・・

なのはとフェイトは急いで現場に向かっていた。

〈もうすぐつきます〉

レイジングハートがそう言ったその時だった。

ドオォォォォォン！！

大気が震えるくらいの轟音が響き渡り、ちょっと先のほうが光った。
なのはとフェイトが更にスピードを上げて現場に到着すると２００機前後のガジェットの残骸が散らばっていた。
なのはとフェイトはそれにも驚いたがそれよりも地面がまるで何かに断ち切られたかの様に亀裂が入っていたことに驚いた。
その亀裂を辿るとその先に目立つオレンジ色の髪をして黒い着物を

着た青年、黒崎一護が鍔のない無骨な刀を杖変わりにして立っていた。
なのはとフェイトは地上に下りて、一護に近づいた。
一護は二人に気づいて刀を疲れきった体で構えて言った。

「お前ら、このロボットの仲間か？」

「違います。私達は時空管理局の者です。
武器を下ろして、お話を聞かせて貰えませんか？」

なのはがそう言って敵じゃないということがわかって安心して疲れが一気に襲ってきたのか一護は地面に倒れた。

「だ、大丈夫ですか！？」

フェイトは心配して、倒れた一護を看病し始めた。

これが死神と魔導師の出会いだった。

第2話　出向者（前書き）

なんかめちゃくちゃ遅くなってしまいました。

第2話　出向者

一護が倒れ、機動六課に運ばれている頃・・・

「うっ・・・」

ミッドチルダから離れた草原で一人の少年が目を覚ました。

「ここは・・・」

少年は起き上がって辺りを見回すが周りは草ばかりなので目印になるような物が何も無い。

「仕方ねぇ。人を探すか・・・」

そう言うと少年の体がぶれ、足元にあった草がちぎれ、宙に舞った。

草が地面に落ちた時には、既にその場に少年の姿はなかった・・・

フェイトSide

「うん。処置はしたからもう大丈夫よ、二人共」
シャマルからそう言われて、私となのはは安堵した。
「そういえばなんでいきなり倒れたんだろ？」
なのはが疑問に思ったことを口にした。
そのことに関しては私も疑問に思っていた。
その疑問にシャマルが答えてくれた。
「彼、かなり疲労が溜まってたみたい。
何か相当、無理してたんでしょうね」
次元震の原因を調べに行った森で出会った私達と同じ歳ぐらいのオレンジ色の髪の男の人。
見た感じ、悪い人ではなさそうだけどあれだけのガジェットを倒す実力があるみたいだし、近くで希少な魔導生物が殺されていたから彼が殺した可能性も無いわけじゃない・・・
とにかく事情を聞かないと思っていたけど、シャマルの話を聞いて今はそっとしておこうと私は思った。

フェイトSide　out

その頃、機動六課正面

「はぁ～機動六課って、聞いてたのよりもでけぇな～」

一人の男が機動六課の建物を見上げていた。
最初は驚いた顔をしていたがそれは徐々に真面目な顔に変わった。

「やっぱり・・・これは・・・」

男はそう呟く。
懐かしそうに目を細めていたがしばらくすると歩き出し、機動六課の建物に入って行った。

なのはＳｉｄｅ

私は運んできたオレンジ色の髪をした男の子の様子を見た後、自分

達の仕事場に戻っていましたが放送で呼び出され、部隊長オフィスに向かっていた。

（何だろう？はやてちゃん。
急に呼び出したりして・・・）

そんなことを思いながら歩いているとちょっと先のほうで機動六課では見たことのない黒い髪の男の人がキョロキョロしながら歩いているのを見つけた。

「あの～どうかしましたか？」

「えっ？」

声をかけるとその男の人はこちらに振り向きましたが私はその顔を見てびっくりした。
え？なんでそんなにびっくりするのかって？
だ、だって今、医務室で眠っている男の人にそっくりなんだもん！！
私がびっくりして固まっていると・・・

「大丈夫か？」

その男の人はそう言って私の顔を覗き込んできた。
余り、機動六課には男の人が居ないからあまりあわないから話したり触れ合ったこと私は覗き込まれておもわずドキッとしてしまった。

「だ、大丈夫です」

「そうか。あっ、そういえば部隊長室って何処にあるか知ってるか？高町なのは一等空尉」

私は男の人が自分のことを知っていることに驚いた。

「私のこと知ってるんですか！？」

「いや、知らないって方が圧倒的に少数派だろ・・・
機動六課の『戦術の切り札（エース・オブ・エース）』と呼ばれ、射撃・砲撃魔法を得意とする魔導師はあんたしかいないだろ？」

「まぁ・・・そうですけど」

私は初対面でいきなりお前呼ばわりされたことに少しムッときた。
でも男の人はそんな私の感情を知ってか知らずか話していく。

「とにかく、俺はあんたを知っているってこと！！
それよりも部隊長室、何処にあるか知ってるんだろ？」

「知ってますけどあんたじゃなくて名前で読んで下さい」

「わかったよ。高町」

「なのはです」

「初対面でいきなりか！？」

「初対面であんた呼ばわりする人に言われたくありません」

「はぁ～わかったよ。なのは」

ようやく、言ってくれる様になったので私は案内することにした。

（言わなくても案内していたけど・・・）
私はふと名前を聞いてないことを思い出した。

「そういえば名前は？」

「ああ、俺の名前か？
俺の名前は・・・」

「志波海燕だ」

なのはＳｉｄｅ　ｏｕｔ

出向してきたのは死んだはずの男。
この男も事件に巻き込まれていくことになる・・・

第3話　自己紹介と六課案内（前書き）

遅くなりました。

第3話　自己紹介と六課案内

機動六課部隊長室

「う～ん」

そこではなのはとフェイトを呼び出した張本人の八神はやてが自分の机で一枚の書類を見ながら唸っていた。

その時、

ビ――――

ブザーがなった。

「どうぞー」

はやては書類から目を離さずにそっけなく返事した。

「はやてー

急に呼び出してどうしt・・・はやて？」

入ってきたのはフェイトと小さな妖s・・・ではなく、はやてのユニゾンデバイスのリインフォース＝（ツバァイ）だった。

フェイトは書類を見ながら唸っていたはやてを見て驚いた。

「あの書類が送られてきた二日前からはやてちゃんずっとあんな感じなんです～」

リインはフェイトにそう言った。

「はやて、一体どうしたの？」

そうフェイトが尋ねるとやっとはやてが書類から目を離しフェイトを見た。

「いやそれがなこの書類に重要なことが一切書かれてないんよ・・・」

フェイトははやてに差し出された書類を手に取り見た。

「本当だ。新しい人が出向して今日来るとしか書いてない・・・」

「だからどの部署で働いていて、どんな人なのかも全くわからへん。こんだけ何も書いてなかったら本局からのスパイの可能性も疑わなあかん」

「でもこんな簡単に疑われる様なことをするかな？」

フェイトが書類をはやてに返しながら言った。

「う～ん。確かにそんなヘマするわけないやろうしな～」

はやてとフェイトが考え込んでいると再びブザーがなった。

「どうぞー」

返事するとドアが開いた。

入って来たのはなのはと黒い髪の見知らぬ男だった。

はやては「誰？」という感じで頭の上に？マークが出ていた。
フェイトはその男が医務室にいる一護に似ているため驚いて固まっていた。

「遅れてゴメンね～二人共・・・ってどうしたのフェイトちゃん？」

「なのは、その人・・・」

フェイトが何故、驚いているか一瞬わからなかったなのはだったがその言葉で理解した。

「にゃはは。驚くのも無理無いよね。
はやてちゃん、この人が今回、出向してきた人だよ。
全く、もうちょっとこういうことは早く言ってよね」

なのはがそう言うと

「なぁ！？本当なんか！！なのはちゃん！！」

「う、うん」

ガタッという音をたて椅子から立ち上がりなのはに後、数？という所まで顔を近づけて聞いた。
その勢いになのはは若干引きながら答えた。

「あなたの名前は？」

「志波海燕だ」

その名前を聞いた途端、フェイトは何かを考え始めた。

はやてとなのははそれには気付いてなかった。

「あなたがこの書類に書いてある出向者ですか？」

はやてはスパイの可能性があるので警戒しながら海燕に聞いた。

「ああ、そうだ・・・っていうかそんな警戒すんなって。部隊長さん、本局からのスパイとかじゃないから」

「そうなんか？」

はやては自分が疑っていることを見抜かれたことに内心、驚いたがまだ警戒していた。

「いい加減、警戒解いてくれないか？
ほら、俺のことが書いてある書類もあるからさ」

そういいながら海燕は書類を取り出し、はやてに手渡した。
はやては受け取ってその書類を見た。
なのはとフェイトも気になり、はやての見ている書類を覗き込んだ。
三人は海燕の役職を見た瞬間驚いた。

「陸士１０８部隊副部隊長！？
この前、ゲンヤさんが言っとった新しい副部隊長ってあんたやったやんか！！」

「ああ。悪かったな副部隊長に見えなくて」

はやてがびっくりして聞くと海燕は少しムッとして答えた。

「にゃはは。まあはやてちゃんには悪気は無いんでそんなムッとした顔しないで下さい」

なのはは海燕にそう言った。

「わかったよ。あ、そういえば挨拶してなかったな。
志波海燕一等陸尉、本日、只今から機動六課に出向となります。
よろしくお願いします」

「「・・・あっ、はい。よろしくお願いします」」

はやてとなのははいきなり海燕が挨拶したので一瞬、キョトンとしたがすぐに挨拶を返した。
フェイトはというと

「・・・」

書類を見て黙ったままだった。

「フェイトちゃん？どうしたの？」

そんなフェイトに気がついたなのはが聞いた。

「へっ？あ、いや、海燕さんの名前をもっと前に聞いたことがあるような気がして・・・」

海燕はそう言われて少し考えた後、言った。

「多分、俺の名前を聞いたことがあるってのは大層な異名を聞いたついでにじゃないか？」

「異名？どんな異名何ですか？」

「俺の戦いを見ていた奴らが勝手に付けた名前だけどな。槍で舞う様に戦うから『槍舞神（そうぶしん）』だってさ。」

海燕は苦笑いしながらそう言った。

はやて達が書類を見て驚いている頃、ミッドチルダのとあるビルの屋上には草原にいた少年がいた。

少年は目の前に広がるビル群を見て眉を顰めていた。

「一体、此処は何処だ？

現世の空座町とは全く違げぇ場所だな・・・・・・・！？」

少年は突然、目を閉じ、感覚を研ぎ澄ます。

しばらくすると少年は目を開けた。

「この霊圧は・・・あいつのだ・・・あいつもいるのか？」

少年はそう言った後、地面を蹴って空中を飛ぶように移動し始めた。

「そ、槍舞神っ！？」

海燕から出た言葉にフェイトは驚いた。

「その異名、私も聞いたことあるの・・・」

「私もや・・・」

なのはとはやてもその異名を聞いてすぐに思い出した。

そんな驚きの連続の自己紹介も済み今度はなのは達の自己紹介に移った。

だが、海燕は三人のことは知っていたため、それもすぐに終わり、なのはが海燕と会った時に迷っていたことを思い出して機動六課を案内することになった。

最初は、訓練しているフォワード四人と顔あわせするために訓練スペースに向かった。

「集合〜！！」

なのはの一声で四人が集まった。

「今日から機動六課に出向してきた志波海燕さん」

「志波海燕一等陸尉だ。これから一緒に仕事をすることになるからよろしく！！
あ、階級が上だからって、堅苦しい呼び方や態度は無しだ。気軽に話しかけてくれ」

海燕がそう言うと四人の固い態度や緊張が一気にほぐれて無くなった。

「じゃあ、スバルから順に自己紹介していこうか」

「「「「はい！！」」」」

なのはの言葉に元気な返事が返ってくると同時に海燕から見て、左端の青い髪の少女から順に前に一歩出て海燕に元気良く自己紹介した。

「スバル・ナカジマ一等陸士です。
特別救助隊に所属していてフォワードトップとして災害救助をしています。
海燕さん、これからよろしくお願いします」

「次はティアナ」

「ティアナ・ランスター執務官補佐です。
今は、フェイトさんの補佐をしながら執務官の勉強をしています。
よろしくお願いします」

「エリオ！！」

「エリオ・モンディアル二等陸士です。

自然保護隊で竜騎士をしています。
よろしくお願いします！！」

「最後にキャロ」

「キャロ・ル・ルシエ二等陸士です。
エリオ君と同じ自然保護隊で竜召喚士として働いています。
よろしくお願いします」

「あ、ああ。みんなよろしく・・・」

海燕は息つく暇も無く、一気に紹介されたため少し戸惑った。
その後も四人からいろんな質問をされたりした。
ティアナからの質問で海燕が１０８部隊の副部隊長だということを明かすと、

「えぇ！？そんなのお父さんからもギン姉からも一言も聞いてないですよ～」

聞かされてなかったことにショックを受けていた。（聞かせる程のことじゃないだろと海燕はこの時思った。）

質問が終わるとなのはが模擬戦をやらない？と言ったがまだ案内が済んでいなかったので模擬戦はまた後日ということになった。

その後は隊員寮、食堂、デバイスルーム、仕事場などいろんな場所をまわって行った。
デバイスルームに行った時はシャーリーの海燕への最初の一言が、

「デバイスを見せて下さい！！」

なのでなのはも海燕はいきなりでびっくりしたが海燕はすぐに応じて、ミニチュアサイズの日本刀のネックレス型のデバイスをポケットから取り出しシャーリーに渡した。

そしてデバイスルームを後にした。

海燕Ｓｉｄｅ

デバイスルームを出てからも俺はなのはにいろんな所を案内して貰った。

そして最後に医務室に向かった。

その途中でなのはが俺のデバイスについて聞いてきた。

「海燕さんのデバイスって槍なんですよね？」

「ああ。基本の１ｓｔモードは日本刀の形状をしていて、２ｎｄモードが槍だ」

「フルドライブとかはあるんですか？」

「ないけど変わりに他のデバイスには無い特殊なシステムがある。まぁ、だけどこのシステムを使えるのは俺と後二人だけだな」

「どんなシステムなんですか？」

やっぱり、質問してくるか。
そりゃ、気になるよな。
でも

「わりぃ。そのことは今はまだ教えられねぇんだ。いつかちゃんと教えてやるからよ」

なのはは「え〜」と言ったが説得すると渋々ながら引き下がってくれた。
そんなことを話している内に俺達は医務室の前まで来ていた。
中に入ると制服の上に白衣を着た女性がいた。

「シャマル先生〜」

「あら、なのはちゃん。どうしたの？」

俺はシャマルと聞いてもイマイチ、ピンとこなかった。

「新しく来た人を案内しているんです。
海燕さん、この人は六課の医務官のシャマル先生。
はやてちゃんの家族でもあるんだよ」

「志波海燕です。
シャマルさん、これからよろしく」

「よろしくね。海燕君」

俺は挨拶しながら思い出していた。
この人もシグナムやヴィータやザーフィラと同じはやての守護騎士

だったことを・・・
シグナム達とは案内して貰っている途中に会って、名前を聞いた瞬間にすぐ思い出したが（ザーフィラの時は思い出すのにシャマルと同じくらい時間がかかったが）
そんなことを思っている間も奥のベットで寝ている顔立ちが俺に似ている奴が気になった。
俺があまりにそっちを見ていたものだから

「気になるの？」

なのはに気付かれた。

「ああ、まぁな。しっかし髪以外は俺に似てるな」

「そうだよね。私はこの人に此処に連れてきた後に海燕さんにあったから見た時はびっくりしたよ」

そういいながらなのはが少し笑った。
何が可笑しいかが俺にはわからなかったが・・・
しかし、この霊圧の高さは隊長格以上かもしれない。（俺より高いし・・・）
だがもし隊長なら霊圧がこんなに漏れているはずがない。
こいつが死神ということはわかったがまだ疑問が残った。

「お邪魔してしまってすいません」

「大丈夫ですよ。また来て下さいね」

俺がいろいろ考えている間にかなりの時間が経ってしまっていた。
案内もここで終わり、戻ろうとした時、六課隊舎内に警戒アラートが鳴り響いた。

「どうしたの！？はやてちゃん！！」

なのはは急いではやてに連絡を取った。

『大変や！！六課内に誰かが侵入した！！』

運命の歯車は着実に回り始める。

キャラ設定（1）（前書き）

今回は海燕と一護です。

キャラ設定（１）

志波海燕

年齢：２８歳

身長：１８３？

体重：６８ｋｇ

所属：陸士１０８部隊（現在は機動六課に出向中）

役職：前線指揮官（陸士１０８部隊では副部隊長）

階級：一等陸尉

魔法術式：近代ベルカ式

魔導師ランク：陸戦Ｓ＋（リミッター時、Ａ）

魔力保有量：ＡＡ

ポジション：フロントアタッカー、ガードウイング

所持資格：中隊指揮官、小隊指揮官、執務官、Ａ級デバイスマイスター、普通自動車免許

デバイス：アームドデバイス『スパイラル』

斬魄刀：捩花

解号：水天逆巻け『捩花』

卍解：不明

容姿：死神の頃とあまり変わりないが少し髪が伸びている。

備考

元、護廷十三隊、十三番隊副隊長でルキアの上官だった死神。
事件でルキアに刺されて死んだはずだったが目を覚ました時には赤ん坊になってミッドチルダにいた。
親がおらず、施設に預けられていた。
死神の時の記憶があるため、赤ん坊の頃から喋れた。
施設にいるだけでは入ってくる情報が限定されていた為、７歳の時に時空管理局に入った。
魔力量はそこまで多くないものの死神の時の実戦経験を生かし、活躍していった。
射撃や砲撃魔法はあまり得意ではなく死神の頃と同じ接近戦をする。
Ａ級デバイスマイスターの資格を持っているのは自分のデバイスを作る為にとったもの。
霊圧は今は外に漏れない様に完全に封じ込めている。そのため斬魄刀は霊圧を解放しないと使えない。
１０８部隊には来たばかりだが死神の時からの性格で部下達に慕われている。

スパイラル

海燕が作ったアームドデバイス。
最初はインテリジェントデバイスを作ろうとしたがあるシステムを組み込む為に断念した。
普段は日本刀のネックレスをしている。（海燕は何故か首にはかけないでポケットに入れているが）
モードは二つある。

１ｓｔモード

形状は日本刀の形をしている。
接近戦を主にやるが射撃、砲撃魔法なども少しできる。

２ｎｄモード

完全な接近戦用。
射撃、砲撃魔法などは一切出来ない。
そのかわりにバリアジャケットの強度や身体能力が１ｓｔモードに比べ、格段に上がる。
形状は三又槍。

モードとは別にインテリジェントデバイスにすることを断念させるほどのシステムが積んである。

海燕「へぇ～。これがこの小説での俺の設定か」

卍解「海燕さん！？」

海燕「おう。どんな設定か見たくて来てみた」

卍解「そうなんだ～・・・・ってそうじゃなくて！！元々、会話なんか書く予定なんてなんですよ！！」

海燕「そうだったのか。まぁ細かいことは気にするなって！！」

卍解「はあぁぁぁぁ～」

一護「ため息つく前に俺のこの小説での設定を見せてくれないか？」

卍解「あ、原作で凄いことになった一護だ」

一護「どうでもいいだろそんなこと」

一護「いや、代償が大きすぎるからチートではないだろ」

卍解「でｍ「いつまでも続きそうなので次、行ってみよう！！」っておい！！海燕、勝手に進ｍ」

黒崎一護

年齢：２０歳

身長：１８１？

体重：６５ｋｇ

斬魄刀：斬月

解号：常時解放型なので解号無し

卍解：天鎖斬月

魔力保有量：ＳＳ

備考

反逆者、藍染惣右介を死闘の末に倒した、死神代行。
一時は藍染と戦った時に、一護自身が月牙になって戦った代償で死神の力を亡くしていたが戦いから一ヶ月経ったある日見た夢で再び、斬月と話したのを気に徐々に力が戻っていった。

今は大学に通いながら代行家業もやっていた。
だがある日、別の世界（なのは達の世界）に来てしまった。
虚化時は完全虚化時にしか打てなかった、『虚閃』が打てるようになった。
完全虚化も少しだけ制御できる様になっている。
魔力は今回、この世界に死神勢の中で唯一ある。
ただし、魔力はあってもただ放出することしか出来ない。

卍解「マジ、勝手に進めるな！！」

海燕「だって長くなりそうだったじゃんか。
読者に迷惑だろうが」

卍解「う、うるせぇ！！」

一護「しっかし、俺には魔力まであるのかよ。
まぁ、放出しか出来ないけど・・・」

卍解「虚閃が虚化で打てるだけでもいいだろ。
大胆、霊圧操作が下手くその一護に魔力が操作できる訳無いだろ」

一護「うるせぇな。霊圧操作なんてそんなちまちましたことできる訳無いだろ。
って時間が迫ってきたぞ！！」

卍解「うおっ、マジか。
それでは読者の皆さん」

卍解・一護「「これからもこの小説をよろしくお願いします！！」」

海燕「俺の存在忘れてねぇか？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5610n/

魔法少女リリカルなのは～漆黒の月～

2010年10月8日19時48分発行